The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「読むこと」の教育 : 言語文化研究・現代アメリカ文学研究・英語教育、それぞれの立場から
Author(s)	小倉, 永慈
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2020, 2019, p. 63-72
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77002
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「読むこと」の教育

――言語文化研究・現代アメリカ文学研究・英語教育、それぞれの立場から――

小 倉　永 慈

１．文化・文学研究の姿勢と視点

2019 年 11 月 16 日、私は大阪大学にて開催された「西尾総長との対話集会―私の研究と社会および世界―」という題目のシンポジウム[1] に参加した。大阪大学の西尾総長ほか、多くの大学関係者に対して、文系学部理系学部を問わず様々な研究科に所属する大学院生が、自らの研究テーマと社会との結びつきについてプレゼンテーションを行った。他の院生によるプレゼンテーションでは、産学連携の大規模な開発、医療の現場で行われる研究、紛争地域での調査、AI の開発に関わる研究など、大学外の社会と直接的に関わる研究の紹介が多かった。現代アメリカ文学研究が専門の院生である私は、普段の学会とは全く異なる発表の場に参加していることに、やや場違いな感覚にならざるを得なかった。その後の懇親会で、大阪大学の役職の方々や他の院生と話して強く感じたことは、文学研究が一体何をしているのか、同じ大学内であっても、ほとんど理解されていないということだ。

シンポジウムにおいて、言語文化研究科・言語文化専攻に所属する私は、「分断の真ん中に立つ人文学――現代アメリカ作家リチャード・パワーズと「われわれ」の環境問題」というタイトルの発表で、研究対象であるリチャード・パワーズ (Richard Powers) が 2018 年に発表した長編小説『オーバーストーリー』(*The Overstory*) を取り上げた。普段の文学研究発表の手続きを踏むことはできず、『オーバーストーリー』が環境破壊に警鐘を鳴らす物語であること、そして、その物語を読むことで、自分とは立場の異なる他者を想像しないでいることができないことを簡潔に話した。そして、いわゆる「文系学部廃止論」など、人文学が置かれた状況は危機的であることを確認した上で、それでも文学研究には意義があると主張した。しかしながら、「この作品には文学的な価値がある。だから研究すべきだ」と主張したとしても、文学研究がほとんど理解されていない場においては空虚に響くだろう。そうではなく、比較文学者ガヤトリ・C・スピヴァク (Gayatri C. Spivak) の言葉を引用しながら、「文学作品を読むことは想像力のトレーニングである。だから個別の文学研究は教育によって開かれたものでなければならない」と主張した。それが、個別の文学研究と社会との、教育を介したつながりだ、と。

[1]シンポジウムの概要は URL を参照：https://www.osaka-u.ac.jp/ja/news/event/2019/11/1601

この視点は、言語文化専攻で開催される共同研究 Cultural Formation Studies（CFS）で得たものだ。2019 年度の CFS 研究会では、スピヴァクによる *Readings* (2014) を精読し、議論した。当研究会は名前を変えて 20 年以上継続されてきたが、前身である「ポストコロニアル・フォーメーションズ (PCF)」からの名称変更に関して、昨年 2018 年度の報告書 *Cultural Formation Studies* I の冒頭で、木村茂雄は以下のように述べる。

> 文化や文学の研究に対する基本的な姿勢や視点には、ある種の連続性が保たれてきたように思われる。簡単にいえば、ひとつには、文化や文学を社会に開かれたものとみなし、その相互関係や相互作用を（必要に応じて「学際的」に）捉えようとする姿勢、そのこととも関連し、ふたつめに、それらの文化や文学が形成される歴史的なプロセスを注視しようとする姿勢である。（木村 1）

シンポジウムにおける、文学研究に関する私のプレゼンテーションは、カルチュラル・スタディーズやポストコロニアル研究から多くの影響を受けている。そして、私が重要視するのは、「文化や文学を社会に開かれたものとみな」す、その姿勢と視点だ。ここに、文学部ではなく言語文化研究科で文学研究することの特徴が表れているだろう。

本稿は、そのような言語文化研究の立場から、文学研究の姿勢と視点、および文学教育の意義について考察する。まず、CFS 研究会で議論したスピヴァクの *Readings* を精読することで、テクストを読む行為それ自体に対して、そして文学教育に対しての、スピヴァクの問題意識を探る。次に、スピヴァクの「読むこと」についてのテクストと、「読まれること」に意識的な現代アメリカ作家デヴィッド・フォスター・ウォレス (David Foster Wallace) とジョナサン・フランゼン (Jonathan Franzen) のテクストを並置させることで、これらのテクストすべてに共通する「読むこと」の主体性について考える。さらに、多くの英語圏文学研究者が大学の英語教育を担っている現状を踏まえて、私自身が従事する大学の英語教育における、文学的な「読むこと」の教授可能性について検討する。以下の考察は、私自身の 3 つの立場――言語文化研究・現代アメリカ文学研究・英語教育――からの、「読むこと」という共通テーマについての変奏の試みであり、文化・文学研究と社会との教育を介した繋がりについての、私の個人的な実践報告である。

2．ガヤトリ・C・スピヴァクの *Readings* を読む――言語文化研究の立場から[2]

スピヴァクによる 2014 年の著書 *Readings* は、文字通り「読むこと」について議論された著書である。序文によれば、本書は 2012 年にインドのプネー大学で行われたセミナーにおいて、大学の学生と教師とのやりとりが元となっている。文学研究に関わる読者としては、学生や教師という立場を超えて、自分自身の問題として読まないでいることはできない。

[2] 以下の考察は、2019 年度の CFS 研究会において議論された内容から着想を得たものが含まれる。研究会の皆様に感謝申し上げる。

様々な文学作品について語りながらも、同時に、テクストを「読むこと」それ自体について語っていることが印象的だ。本稿では、スピヴァクが *Readings* の中で述べている文学教育について、および「読むこと」の主体性について考察する。

Readings において繰り返し強調されていることは、文学教育についてのスピヴァクの主張だ。序章において展開されるその主張は、特定の文学作品に端を発するわけではなく、スピヴァク自身の経験に基づいている。1961 年にアメリカのコーネル大学に進学したスピヴァクは、その翌年の 1962 年、母国インドで中印国境紛争が勃発したことを知る。国境 (Borders) をめぐるこの戦争を知った時、"Hearing about the war in India, I thought borders were fictions. I thought, for the first time, that the earth came unmarked, except by natural boundaries" (Spivak, *Readings* 3) というように、スピヴァクは国境がフィクションであると感じたという。これは、2003 年に出版された『ある学問の死』(*Death of a Discipline*) において、比較文学と地域研究の協同の必要性を主張する第 1 章のタイトルが「越境 ("Crossing Borders")」であったことを思い起こさせる。学問と学問の間の Border、国と国の間の Border、北半球と南半球の間の Border など、あらゆる Borders を越境することがスピヴァクの問題意識として重要だろう。*Readings* においても、"And therefore, all facts to the contrary—we who learn from fiction must think a borderless world of unconditional hospitality" (Spivak, *Readings* 3) というように、Borders を越境するために必要なのがフィクションだと主張される。『ある学問の死』で提唱される「惑星思考 (Planetarity)」と関連して考えるならば、われわれがフィクションから学び、想像しなければならないのは、恣意的な線を引かれ、グローバル資本の利害が絡んだグローブ (Globe) ではなく、線を引かれる以前の、「無条件の受容力 ("unconditional hospitality")」を備えた惑星 (Planet) だ。

母国で起こった戦争によって芽生えた、Borders はフィクションであるという意識をもって、スピヴァクは文学教育を彼女のアクティヴィズムの中に位置付ける。人間は生まれながらにして「倫理的 ("born ethical")」であり、「理性以前 ("before reason")」に第一言語を習得する (Spivak, *Readings* 3)。「しかし、倫理に向かうことができる推進力は、すべての生物としての生活の中で働く、根本的な利己から離れてアクティヴェイトされなければならないだろう ("but I think the possible impulse towards the ethical has to be activated away from the underived selfishness which also operates in all creaturely life")」と述べられる (Spivak, *Readings* 3)。そのようなアクティヴィズムにおいて、文学教育は有効であるとスピヴァクは主張する。

> In this activation, a literary education can be a great help, because the teacher engages directly with the imagination. The teacher of literature has nothing else to teach. If we teach literary history, it is on the model of history as a discipline. If we teach literature as evidence—and even Franz Fanon uses it as evidence—it is on the legal model and so on. But by ourselves, we have nothing else to engage with than training the imagination. (Spivak, *Readings* 3-4)

スピヴァクによれば、文学教育が有効なのは、文学作品それ自体に価値があるからという理由ではなく、「読むこと」それ自体が「想像力のトレーニング」となるからだ。文学史を教えることは、「単数形の学問 ("a discipline") としての歴史のモデル」であると述べていることに注意しなければならない。なぜなら、スピヴァクは『ある学問の死』 (*Death of a Discipline*) という表題が文字通り示すように、「単数形の学問の死」を宣告しているからだ。文学研究を、単独で成立する閉じた学問として捉えるのではなく、様々な学問同士の関係において捉えることが要求されている。さらに、文学を「証拠 ("evidence")」として教えるならば、それは「法的なモデル ("the legal model")」となる。文学作品に先行する現実世界、思想、文学理論などの「証拠」としてのみ文学作品の解釈を教育することは、例えば、ある事件の証拠が有効であるか否かを立証するような法的な手続きとアナロジーな行為となるだろう。このスピヴァクの批判は、そこには読み手の想像力の介入が不十分だという、「読むこと」の主体性の問題が含意されている。そうであるからこそ、最も重要なことは、「想像力のトレーニング」としての「読むこと」に「能動的に働きかけること ("to engage")」だ。

「読むこと」の主体性の問題とは、主体の認識に関わる問題だ。「想像力のトレーニング」だけが、われわれは「認識の遂行能力を変えることができる」と、スピヴァクは以下のように続ける。

> It is only with the help of the training of the imagination that we can change our epistemological performance. In other words, we change how we construct objects for knowing. And engaging with the imagination in the simplest way makes us suspend our own interests into the language that is happening in the text, the text of another traced voice, the voice of the presumed producer of the text. I use these words 'trace', 'text', 'voice' because the utility of the imagination is not confined to what we recognize as 'literature' today. (Spivak, *Readings* 4)

「認識の遂行能力を変えること」とは、「学ぶべき対象を構築する術を変えること ("we change how we construct objects for knowing")」と言い換えられている。一般的に、文学研究が対象とする文学としては、詩、演劇、小説などが挙げられる。しかしながら、「想像力の行使は、今日われわれが「文学」と認識するものにだけ限定されるわけではない」と書かれており、われわれのテクストとの向き合い方に再考を促している。いわゆる「文学」に限定されることのない、あらゆる「テクストの中で、現在進行形で起こっていること ("that is happening in the text")」を「読むこと」に努めなければならない。

Readings の序章以降では、スピヴァクによるテクストの読みが実践される。そこで注目すべきは、読む側の主体性・認識・想像力をテクストに積極的に介入させている点だ。例えば、 "Fanon Reading Hegel" と題された章では、"These kinds of 'mistakes' [...] are proofs of the most engaged ways of reading, claiming the text as the other's text for me, and we ought to look at the 'mistakes' in that spirit" (Spivak, *Readings* 35) というように、「誤読 ("mistakes")」が重要で

あると述べられている。テクストに読み手の想像力を介入させる意味での「誤読」は、他者のテクストを、読む「私」の方へと引き入れる。もちろん、テクストを自分勝手なやり方でやみくもに解釈してよいということではないだろう。ここで主張されているのは、「能動的に読むための最良の方法 (“the most engaged ways of reading”)」としての「誤読」だ。

また、“Reading Spivak” と題された章では、スピヴァクは文字通りスピヴァクを読んでいる。具体的には、自身の1985年のテクスト “Three Women’s Texts and a Critique of Imperialism” の読み直しだ。その論文が扱う女性作家のひとり、シャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë) による『ジェーン・エア』(*Jane Eyre*) を、スピヴァクは学生のころに何度も読んでいたという。その時の経験とは「善良なコスモポリタンとしての教育を受けてアメリカにやってきた移民の、典型的な自叙伝的瞬間 (“a typical autobiographical moment for the conscientious metropolitan educational immigrant in the United States”)」(Spivak, *Readings* 68) だという。孤児のジェーンが身分を超えた結婚にいたる物語と、インドで教育を受け、さらにアメリカの大学に進学した自身の経験とが重なる瞬間なのだと読み取れる。また、「白人に愛される移民 (“the immigrant who is loved by the whites”)」(Spivak, *Readings* 69) という言葉からも、特権的な移民としての自身の立ち位置について自覚的なことが読みとれる。そして、“I wrote ‘unlearn your privilege’ before I set foot in the activist sphere. You must use your privilege—here class-productive in the literary—and turn it around against itself” (Spivak, *Readings* 71) というように、スピヴァクはこの特権を利用せよと主張する。しかし、ただそれを利用するだけではなく、それを「忘却 (“unlearn”)」しなければならない。そのような自己批判を伴った「想像力のトレーニング」こそが、スピヴァクの文学教育観だ。

３.「読むこと」の主体——現代アメリカ文学研究の立場から[3]

Readings における「読むこと」の主体への問いを、私自身の現代アメリカ文学研究へと投げかけてみたい。リチャード・パワーズ、そして彼の同時代作家であるデヴィッド・フォスター・ウォレスとジョナサン・フランゼンは、長編小説を執筆する小説家であると同時に、エッセイの執筆や批評も行う。文化理論・文学理論のみならず、多方面の分野の知識を有しているエリート作家でもある。「ポスト理論小説」といった研究[4] を持ち出すまでもなく、批評家や文学研究者が、文化理論・文学理論に精通している作家本人の意図を無視して、それらの理論を援用して議論することは不毛だろう。そのような読解は、作家が作品の中に紛れ込ませた理論を探し当てるだけの作業になりかねず、スピヴァクの批判する「証拠 (“evidence”)」探しの文学研究に陥る恐れがある。この問題意識のもと、私の研究で

[3] 現在、リチャード・パワーズ、ジョナサン・フランゼン、デヴィット・フォスター・ウォレスら現代アメリカの白人男性作家たちを「読むこと」についての博士論文を執筆中。

[4]「ポスト理論小説」とは、テクストに文化・文学理論を内在させた小説の形式を指す。詳しくはジュディス・ライアン (Judis Ryan) による *The Novel After Theory* (2011)、マーク・マクガール (Mark McGurl) による *The Program Era* (2011)、ミッチャム・ヒュールズ (Mitchum Huehls) による “The Post-Theory Theory Novel” (2015) を参照。

は「読まれること」に意識的な作家たちを「読むこと」を試みている。そのために、考察の対象となるテクストは、小説だけでなくエッセイやインタビューを含む。本稿では、「読むこと」のスピヴァクの議論と、ウォレスとフランゼンの「読まれること」の自意識との交点について考えたい。

1996 年に 1000 ページを超える長編小説 *Infinite Jest* を発表したウォレスは、エッセイの名手としても知られる。頻繁に参照されるものとしては、いわゆる X 世代や MTV 世代と呼ばれるウォレスが同時代の作家たちとテレビの関係について論じ、冷笑的なアイロニーを批判したエッセイ "E Unibus Pluram" や、アメリカ文学研究者のラリー・マキャフェリー (Larry McCaffery) との対談が挙げられる。本稿が注目するのは、後者の対談においてウォレスが「読むこと」、あるいは「読まれること」について批判的に語っている個所だ。

> I just think that fiction that isn't exploring what it means to be human today isn't art. [...] and we all buy the books and go like "Golly, what a mordantly effective commentary on contemporary materialism!" But we already "know" U.S. culture is materialistic. This diagnosis can be done in about two lines. It doesn't engage anybody. What's engaging and artistically real is, taking it as axiomatic that the present is grotesquely materialistic, how is it that we as human beings still have the capacity for joy, charity, genuine connections, for stuff that doesn't have a price? And can these capacities be made to thrive? And if so, how, and if not why not? (McCaffery)

ある文学作品を読んで、そこに現代に物質主義に対する批判を読み取ったとしても、「われわれはアメリカ文化が既に物質主義だということは知っている」のだから、そのような読みは「誰に対しても働きかけない ("It doesn't engage anybody")」。ウォレスによるこの批判は、文学研究者の耳に痛烈に響く。「物質主義 ("materialism")」という言葉は、文化・文学研究のあらゆるキーワードに置き換え可能だろう。「物質主義」、あるいは任意の「何か」が現実世界において自明のものだと、まずは認めなければならない。それは、読者の「受容力 ("capacity")」の問題だ。

先行する現実の表象としてのみテクストを読む作業は、スピヴァクが批判する「証拠」探しの文学研究とも通じる。ウォレスによる「誰に対しても働きかけない」という診断とは反対に、スピヴァクによるマハシュウェタ・デビ (Mahasweta Devi) の評価は、"Here, Mahasweta is admirable—she uses her privilege, however feudal. She puts the fear of God into bad police people and bad government officers. This is to engage with the postcolonial nation, rather than imitate a postcolonial theory that simply faults European colonialism" (Spivak, *Readings* 72) というように、「能動的に働きかけること ("to engage")」に対してなされる。デビは「ポストコロニアル理論を模倣するのではなく、ポストコロニアルな国家に対して能動的に働きかけている」と、スピヴァクは評価する。「読まれること」に自意識的な作家の「能動的な働きかけ」に対して、読者はまた「能動的に働きかける」ことによって、「受容力」を涵養

することが求められる。

「読まれること」に自意識的な作家のもうひとつの例として、次はフランゼンの長編小説『コレクションズ』(*The Corrections*) における批評家批判に注目したい。大学教員のチップ・ランバート (Chip Lambert) は、文化批評のクラスで広告の批判的読解を教授しているが、学期の最後に学生に痛烈に批判される。

> "This whole class," she said. "It's just bullshit every week. It's one critic after another wringing their hands about the state of criticism. Nobody can ever quite say what's wrong exactly. But they all know it's evil. They all know 'corporate' is a dirty word. And if somebody's having fun or getting rich—disgusting! Evil! And it's always the death of this and the death of that. And people who think they're free aren't 'really' free. And people who think they're happy aren't 'really' happy. And it's impossible to radically critique society anymore, although what's so radically wrong with society that we need such a radical critique, nobody can say exactly. *It is so typical and perfect that you hate those ads!*" (Franzen 50-51; 強調原文)

マルクス主義批評家であるチップは、彼が妄信する批評家の理論を援用しながら、広告で使われる物語に批評的読解を加え、その背後の企業の意図を批判するが、この学生にはまったく響かない。チップがその広告を憎んでいるだけだと学生に一蹴され、彼は何も言い返すことができない。この学生による批判から読み解くべきは、決して無視することのできない読者の欲望だ。テクストに「能動的に働きかける」読む行為は、読み手の欲望から逃れられない。文化研究・文化研究において、対象のテクストを読み、それを論理的かつ客観的に論じることが求められるが、同時に、読む主体の欲望や主観なしには決して成立し得ない。だからこそ、それを意識した上で、自分が信じる前提を常に問わなければならない。論駁されたチップは、その学生と性的関係をもったのが原因で大学を解雇され、彼が信じていたマルキストの著書を売って金に換える羽目になる。

「読むこと」は、読者がテクストに「能動的に働きかけること」だ。少なくとも、「読まれること」に自意識的なウォレスやフランゼンのような作家は、読者の欲望が解釈に影響を与えることについて批判的に語っている。そのような作家の意図を抜きにしては、作家・テクスト・批評の関係は成立し得ない。もちろん、必ずしも作家の言葉に従う必要はないだろう。しかし、一般読者であれ、批評家であれ、文学研究者であれ、「読むこと」の主体の問題からは逃れられないということを常に意識し、問い直さなければならないはずだ。

4.「読むこと」の教育——英語教育の立場から

Readings において、「想像力のトレーニング」、あるいは「読むこと」の教育について、われわれが簡単に拝借できる方法論が提示されているわけではない。*Readings* を「読むこと」それ自体が「想像力のトレーニング」だと言える。そうであるならば、このテクストに最

大限の想像力を介入させながら、そこで得られた視点をわれわれ自身の仕事に引き入れることが有益だろう。最後に、これまでのテクスト読解の議論を、私自身が従事する英語教育へと接続させたい。現在、私は大学における英語講師の立場であり、文学作品を題材にした授業の経験はない。文学作品を扱う文学教育について私が語る立場にないのは承知の上だが、大学の全学部共通で行われる英語教育の現場に限定した上で、文学的な「読むこと」の教育という視点をもつことができるか、ということが本稿の最後の問いだ。

まず、文学教育に関する議論が、広い読者層を想定した一般書の形で発表されている例を参照したい。文学作品を活用する例としては、2017 年に日本英文学会関東支部に所属する文学研究者が中心となって出版された『教室の英文学』が挙げられる。本書は、第 1 部「英語を教える」、第 2 部「社会・文化を教える」、第 3 部「英文学を教える」で構成されており、第 1 部においては、英語を教える手段・題材として英文学を活用するアイデアが紹介されており、示唆に富む。また、「読むこと」それ自体に焦点を当てた議論としては、2019 年に刊行された『精読という迷宮』が挙げられる。本書を構成する全 3 部のうち、第 3 部は「精読と文学教育」と題されている。少なくともこの 2 冊の例から、文学研究において、大学における文学教育の重要性が議論されており、それを文学研究の外部へと発信している状況がわかるだろう。

本稿が特に着目するのは、『精読という迷宮』に収められた、伊藤聡子による「パワーポイントの無い風景――文学的な精読を考える」だ。伊藤は、精読 (close reading) の技術 (skill) と技巧 (art) を区別した上で、次のように述べる。

> 文学教育を文学批評理論とほぼ同一視できた時代ならば、文学的精読は高度なリテラシー獲得に結びつくと考える根拠が曖昧でもよかったのかもしれない。しかし繰り返すように今はそうはいかない時代である。リテラシー教育の扱う広義の技術（スキル）としての精読と、文学研究の技巧（アート）としての精読との中間に位置づけられるものとして、教授可能な高度の技術としての文学的精読が存在する、と文学研究者がもし自負するのであれば、情報テクストの精読でも可能な批判的読みという視点とは別に、何か他の視点から文学テクストを文学的に精読する技術に特有だと思われる点を考えなければならない。（伊藤 297-98）

「文学的精読は高度なリテラシー獲得に結びつく」という理解が、はたして文学部以外に根付いているだろうか。本稿の初めに紹介した私のプレゼンテーションは、このような問題意識に端を発したものだった。そして予想通り、同じ大学内であっても文学研究の意義どころか、正体さえも理解されていない印象を受けた。だからこそ、「教授可能な高度の技術としての文学的精読が存在する」ことを本気で信じるのであれば、それは文学部内だけではなく、むしろ文学部の外に向けてその教授可能性を示さなければならないはずだ。多くの英語圏文学の研究者が、文系理系を問わず様々な学部の英語教育を担っている現状で、この「特権」を利用しない手はない。そして、そこで使用されている教材の多くが、文学

テクストではなく情報テクストであることは無視できない。対象が文学テクストではなくても、そこに文学的な精読の教育、言い換えれば、「想像力のトレーニング」として読む主体がテクストに「能動的に働きかける」ような「読むこと」の教育が成立するのかどうか、考えなければならない。

ここで、英語講師としての私の経験について語ることで、情報テクストを教材とした「読むこと」の教授可能性について考えたい。大阪府のある私立大学の英語科目にて、私は教材として『白熱議論：どちらに賛成？』を採用した。例えば、「動物園の動物たち」、「防犯カメラ」、「エクストリームスポーツ」、「人工知能」などの 15 のトピックについて、それぞれ「賛成」と「反対」の立場からのエッセイが用意されている。1 つのトピックについて 2 つのエッセイを精読した上でグループディスカッションを行い、両方のエッセイから適切に引用しながら作文することを一連の流れとした。例えば、「カジノとギャンブル」に関するトピックでは、合法カジノの是非が、主に「犯罪」、「経済」、「中毒」の観点から議論されている。テクストの議論だけでは一面的なので、テクスト読解に加えて、現在進行形で IR 誘致を進める大阪の現状に対しても言及することを課した。その上で、単純に賛成や反対を決めるのではなく、自分自身に関わる問題として想像して議論するように求めた。予想通り、「犯罪」や「中毒」という観点から、反対派の立場で論述する学生が過半数だった。ディスカッションの最中で、ある学生が「考えたところで何も変わらない」と不満を漏らしたことが印象に残った。もちろん、大阪の IR 誘致に関しては先の選挙結果の影響が大きいことから、われわれ 1 人 1 人が考えることで状況が変わることは当然あり得る。しかし、そもそもギャンブルをしない学生にとって、ギャンブルの是非について能動的に議論することは困難だろう。

その中で、特に印象深い論述があった。その学生は、自分がギャンブラーであるという個人的な立場表明から話を始めていた。しかし、ギャンブルが好きだからといって、全面的に賛成するのではなく、自分がギャンブルをしたいという欲望を表に出すことによって、合法カジノがもたらしうる満足と弊害について、積極的に想像力を介入させながら、論理的かつ主観的に論じていた。単純に「賛成」あるいは「反対」という二分した立場の一方を選択することなく、2 つのテクストと大阪の現状に対して、結果的に、非常にクリティカルな考察を展開していたのだ。私はここに、対象が文学テクストでなくとも、情報テクストや目の前の事象を「文学的に」精読することの萌芽を認めないわけにはいかなかった。文学テクストを教材としない英語教育においても、文学研究で得られた視点を再文脈化することは可能だと確信した瞬間だった。経験の有無は確かに重要だが、だからといって皆がギャンブルを経験すべきだと言いたいわけではない。文学研究者ならここで、経験と未経験の隙間を埋める想像力をトレーニングする教材として「役に立つ」文学テクストを、学生に提供できるはずだ。

英語という言語のグローバルな覇権によって、英語教育は文系理系を問わず行われている。英語一強の状況に対する批判はあってしかるべきだが、英語圏文学の研究者は、その

特権を利用しない手はない。スピヴァクはインドにおける英語教育について、“You can absolutely utilize the excellence of English studies: make it your own, sabotage it, turn it round. When you begin to teach, start from your mother tongue, situate it in English and go to another regional language—do not resist Hindi” (Spivak, *Readings* 73-74) と述べている。インドの公用語として規定されているヒンディー語と英語は、イギリスによる植民地支配の遺産であることは言うまでもない。植民地支配それ自体は批判すべきものだが、その結果として根付いた言語に抵抗するのではなく、それを利用すべきだとスピヴァクは繰り返し主張する。「母語を英語の中に位置付ける (“situate it in English”)」ことは、「読むこと」、そして「学ぶこと」の主体の位置について、われわれに再考を促すだろう。そして、他の言語へと移る (“go to another regional language”) とは、インドが言語州によって分割されたことを鑑みるなら、別地方の言語を学ぶことが、州と州を隔てる Border を文字通り越えることを意味する。スピヴァクのアクティヴィズムの視点を脱文脈化し、英語教育の現場に再文脈化することで、英語教育の特権を利用し、英語・日本語を問わない思考力と想像力を養う教育に活用することができる。その意味で、文学教育は社会の「役に立つ」はずだ。「読むこと」の教育は、自分とは異なる立場の他者を、自分の中の他者を、あらゆる Borders の向こう側を想像することができる、寛容な受容力を涵養させるトレーニングとして有用なのだから。

参考文献

Franzen, Jonathan. *The Corrections*. 2001. Picador, 2002.

Jewel, Mark. *Taking Sides: Opinions For and Against*. Asahi Press, 2017. （『白熱議論：どちらに賛成？』朝日出版社、2017 年。）

McCaffery, Larry. “A Conversation with David Foster Wallace.” *The Review of Contemporary Fiction*, vol. 13 no.2, 1993, https://www.dalkeyarchive.com/a-conversation-with-david-foster-wallace-by-larry-mccaffery/, Accessed 27 April 2020.

Powers, Richard. *The Overstory*. W.W. Norton, 2018.

Spivak, Gayatri Chakravorty. *Death of a Discipline*. Columbia UP, 2003.

---. *Readings*. Seagull Books, 2014.

---. “Three Women’s Texts and a Critique of Imperialism.” *Critical Inquiry*, vol. 12, no. 1, 1985, pp. 243-61.

Wallace, David Foster. “E Unibus Pluram: Television and U.S. Fiction.” *A Supposedly Fun Thing I’ll Do Never Again*, Little, 1998, pp. 21-82.

伊藤聡子「パワーポイントのない風景──文学的な精読を考える」『精読という迷宮』吉田恭子・竹井智子 編著、松籟社、2019 年、283-310 頁。

木村茂雄「はじめに」『言語文化共同研究プロジェクト 2018 *Cultural Formation Studies* I』大阪大学大学院言語文化研究科、2019 年、1-3 頁。

日本英文学会（関東支部）編『教室の英文学』研究社、2017 年。